

Zero Sum Short Stories

0 6

The Nightmare Rift



Horikado Nagayasu

The Nightmare Rift

(悪夢の裂け目)

Original author

Tomomi Kobayashi

English version

Sophie Foster

Supervisor

Horikado Nagayasu

Scientific adviser

Tsuneo NoVA

目次

墜落 - 3 -

蛮族 - 4 -

残虐 - 14 -

循姦 - 28 -

遊戯 - 44 -

質問 - 65 -

火刑 - 74 -

漂着 - 80 -

追記 - 86 -

参考：言語体系 - 88 -

後書き - 90 -

注記：「台詞は原則として英語です」
「行書体の部分のみ日本語です」

墜落

見渡すかぎりの青、青、青……と、ちょっとだけの白。パステルブルーの海と、その上に浮かぶ小さな白い雲。そのすべてを眼下に見ながら飛ぶ水上飛行機。

「どこまでが海でどこからが空か、分かりませんね。このファンタジックでクリアな景色だけでも、ツアーに参加した意義があると思いませんか。トモミ？」

ソフィが、エンジンの音に負けまいと耳元に口を寄せて——私の太腿を大胆に撫でた。

私もソフィの言葉に同意したが、手の動きには同意しかねている。

ワールドワイド・マッチングアプリの『アドベンチャラスガーデン』が企画した『ランダムブーケ』に応募した私は、ソフィとのスポンサードペアリングを提案された。費用はすべて主催者持ちで2週間をリゾート地で過ごし、毎日の様子をふたりがそれぞれレポートする。親密な関係に発展しても、喧嘩別れしてもかまわない。もちろん主催者としては、ペアリングに自信满满。私たちは125番目だか126番目だかのスポンサードペアリングで、今のところ破綻した例は無いそうだ。そんな靈驗あらたかなアプリなのに、少なくとも日本ではマイナーだ。だから、日本人である私が選ばれたのかもしれない。ついでに言うておくと、結果がどうなっても、賞品も罰則も無い。

シスジェンダーでヘテロセクシャルを自認していた私としては、意想外のペアリングだったけれど、それだけに興味も湧いた。南太平洋の観光ズレしていない小島というのも面白そうだし、大学の夏休み中というのも好都合だった。

ジェット旅客機とプロペラ機（チャーター）を乗り継いで、2週間を滞在する島に到着したのが昨日のこと。そこで初めて、リアルのソフィと会った。年齢は18歳。2コ下だけど、ふたりが並ぶと、体格も顔つきも私のほうが幼く見える。ソフィはジュニアハイスクールの頃からドミナント（タチ）だったというから——ややこしい2週間になりそうだ

というのが、ソフィに対する第一印象だった。

そのややこしさが、いきなり頂点に達そうとしている。拠点の島から200マイル離れた無人島で2泊3日のプチサバイバルを『ランダムブーケ』から指定された。自分は確実に食べられてしまうだろうなと、覚悟せざるを得ない。まあ、年下の『お姉様』も悪くないかな。

ガクンと、飛行機が揺れた。雲が左前方からせり上がってきて、激しく震える。いや、震えているのは飛行機のほう。

「ダムン！　しっかりつかまっている！」

パイロットが叫ぶ。飛行機の姿勢を立て直そうとして、操縦桿を前後左右に揺すっている。雲が正面におおいかぶさって、くるくる回り始めた。

「メーデー、メーデー、メーデー！　ZK、パパ・アルファ・ハワイ。エアタービュランス、ストーリング！」

機首のエンジンから黒煙が噴き出して、その一部が床下から吹き込んでくる。目がまわっているところに煙を吸い込んで、気分が悪くなった。

「オオオ！　ワーツ！？」

真昼の明るさを圧倒する閃光が正面に広がって、飛行機全体を包んだ。と同時に、ぱたぱたとエンジンの音が消えた。

もしかして、これが死の瞬間なのだろうか。薄れる意識の中で、私はそんなことを考えていた。

蛮族

身体のあちこちをまさぐられている。寝込みを襲うなんて卑怯だ。乳房をつかんでいる手を払いのけながら、目を開けた。

「え……？」

覗き込んでいる顔は、ソフィではなかった。褐色の肌に白い筋を描いた……

「きゃあああっ……?!」

叫んで跳ね起きようとした。が、何本もの手に押さえ込まれた。

土人という単語が頭に浮かんだ。原住民、蛮族……。彼らに取り囲まれて、身体じゅうを撫でまわされ、あるいはつかまれていた。

蛮族の手が止まった。好奇の目で私を眺めている。

飛行機が墜落して、奇跡的に助かって、この砂浜に漂着したのだろうか。

「ノオオオッ！ さわらないで！」

すぐ近くでソフィの悲鳴があがった。そちらを見ると——数人の男たちに取り囲まれている。ソフィは、蛮族同様に全裸だった。いや、蛮族は全裸ではない。太長い巻貝をふたつに割ったケースを腰に縛りつけて、ペニスと睾丸を包んでいる。

あっと気づいて、私は自分の身体を見下ろした。全裸だった。濡れそぼった淫毛が股間に貼り付いている。

「あなたたちの仕業なのですか？」

日本語よりは通じる可能性があると考えて、英語で詰問した。

男たちが顔を見合わせ、頭をかしげる。

「ジェニョ？ ミ、ミ、ミ」

私の顔を覗き込んでいた男が私を指差し、自分を親指で差し、右手をひらひらと振った。

「ニャ、ニョミ！」

隣の男も私を指差し、ついで自分に親指を向けた。

「ジェニャ」

ミミミと言った男が、仲間を見回してから手首を交差させた。

「ゴンゴンゴン！」

他の男たちが一斉にうなづく。

蜚族たちは私を引き起こして、植物の蔓で手首を縛った。

「やめて。私たちは敵じゃない。言葉の分かる人はいないの？」

パニックの手前で必死に踏みとどまって、コミュニケーションを図った。しかし、蜚族たちには通じない。

「ゴンゴン」

「ジェ、ニヨミ、ニヨミ、ニヤ」

「ジェニヨジェニヨ、ゴンゴン」

限られた語彙（それが言葉だとすればだが）を喚き交わしながら、私の足も縛った。長い棒を持ってきて、交差した手首と足首に通す。ふたりがかりで棒を担ぐ。私は仕留められた獣みたいに、吊るされてしまった。

ソフィも、まったく同じ姿で吊るされている。私みたいにコミュニケーションを試みたりはせず、落ち着いた（泰然自若と腰を抜かしている？）様子で周囲を観察している。

砂浜はすぐ灌木の林になった。踏み分け道を運ばれて、20m四方ほどの広場に出た。その奥はジャングルになっているが、広場の左右には3mくらいの高さまで土が盛りられている。草を束ねた大小の円錐形のテントが盛り土の奥のほうに並び、広場の中央では火が焚かれている。

「トンミ、ジェニヨ、ゴンゴン」

それが呼び掛けだったのだろう。ひととき大きなテントから、大柄な男が姿を現わした。中年に見えたが、実年齢は推測しがたい。褐色の全身に、赤白青の紋様を塗りたくっている。股間を包む貝殻も他の者より大きく、鮮やかな紋様まで描かれている。族長だと、私は見当をつけた。

棒に縛りつけられたまま地面に下ろされた私とソフィを覗き込んで、首をかしげる。

あちこちのテントから、さらに男たちが出てくる。みんな、顔には白い筋や幾何的な紋様を描いて、上半身にも化粧を施している。

「ゴンゴン、ジェニヨ。ニヤジェニヨ？ ミジェニヨ？」

族長が両手を頭上に突き上げた。

「ゴンゴン」 焚火の両側を指差した。

両手両足を踏ん張って、漢字なら『大』、アルファベットなら『X』を全身で表わしながら、それまでより重々しい口調で告げる。

「ジェニョ、ゴンゴンゴンゴン」

たちまちに、男どもが忙しく立ち働き始めた。焚火の両側に深い穴を掘る。枯れ木をスコップ代わりにしていた。何人かが広場の奥の森へ姿を消して、じきに硬い音が響き始める。

別の数人が、あちこちのテントから枯葉を持ち出して、焚火と穴とを囲むように、クッションさながらに並べていく。

穴を掘っている男、森へ行った男、広場でうろうろしている男。全部で20人くらいだろうか。女子供はテントの中に隠れているのか、ひとりも姿を見せていない。

「ねえ……」

はっきりと呼びかけられて、私は声のほうへ頭を向けた。ソフィだった。

「なんだか、ひどく様子がおかしいと思いませんか？」

あらためて尋ねられるまでもないことだ。

「あのとき、島影は見えなかった。それなのに、ここに来ています」

きっと、何日も何十Kmも流されたのだ。けれど——ふたりそろって同じ場所に漂着するなんて、ありえないほどの偶然だ。

「墜落したときの、不思議な光を覚えていますか？ それに、服もアクセサリーも無くなって、この身体だけが残っています」

「……………」

身体が残ってなければ死んでいる。しかし、指摘されてみれば不思議かなとも思う。漂流中に脱げたとしても、靴下くらいは残っていておかしくない——と、そこまで考えて。まったく不思議ではないと思い当たった。意識を取り戻す前に、蛮族どもに脱がされてい

たのだろう。

私は、自分にもソフィにも呆れてしまった。縛られて、なんだかもっとひどいことをされそうなこの状況で、なに呑気なことを考えてるんだろうか。

「わたしはプライベートパイロットのライセンスを持っています。あんな平穏な空で、エアービュランスなんて、あり得ません。あの光だって、自然現象でもメカニカルでも、説明が付きません」

自然でも人工でもなければ、なんだというんだろう。自分の知識はごく限られていると自覚しているけれど、ソフィは自分よりもさらに年若いのだ。

「もしかすると……異世界？ 時空スリップとか転位とか」

カフェでお茶でも飲んでいたら、嘔き出していただろう。さいわい、口にはなにも含んでいなかったし、大げさなジェスチャーも封じられていた。

この子、ジャパニメーション（ラノベを含む）のオタクだったんだと——マッチングの一因が分かったような気がした。でも私は、もうちょっと硬派のつもりだったけどな。

「わたしだって、そんな馬鹿なことが現実には起きるとは思っていませんけれど……」

私の白けた反応に気づいてか、ソフィが言い足す。

「あらゆる可能性を考えに含んでおいたほうが、より柔軟に対処できると思ったので」

ふうん。意外としっかりしてるかな。

なんて、パニックも起こさずにいられるのは、この原住民だか蛮族だかが、大げさなジェスチャーをするので滑稽に見えてしょうがないせいもある。刃物（金属が無いなら、動物の骨や貝殻を鋭く削った得物？）を突きつけられたりしたら、こんな落ち着いてはいられないと思う。

——凶器が無くてもじゅうぶんに怖い状況だと、すぐに思い知らされた。

森から樹の幹が2本と太い枝が5、6本も運び込まれて。地面の上で十字架が組まれた。正確には横木が2本あるから、キの字架というんだろう。英語ではギリシャ式十字架？

私たちは、やっとう手足の蔓をほどいてもらえた。が、何人にも押さえ込まれて、組んだ

ばかりのキの字架に磔けられた。族長がジェスチャーで示した『X』の形で。

キの字架が起こされて、焚火の両側に掘られた穴に立てられた。

処刑されるのではないかという恐怖よりも、開脚させられた中心を覗き込まれる羞恥が圧倒的だった。両足を縛りつけられている下の横木が、地上からせいぜい20cmなのが、せめてもの救いだった。

男たちがぞろぞろ集まって来て、私たちを取り囲んだ。

「ウープ」

族長が両手を広げて押さえつけるようなジェスチャーをすると、全員が焚火と私たちとを取り囲んで、枯葉のクッションに座り込んだ。

男たちの頭が私の股間よりも下に来て——大声で叫びたくなった。けれど、その前に。

「アーアアア、ア！ アーアアア、ア！」

海岸の方角から、ターザンみたいな雄叫びが聞こえてきた。

男たちが一斉に立ち上がった。枯葉を両手に持って、焚火にくべた。たちまち、白い煙がもうもうと立ち込める。

男たちが焚火に向かって平伏する。

「オオオ、オー。オオオ、オー」

上体を起こして両手を上げ、すぐに平伏する。それを、延々と繰り返す。

微風が正面から吹いているので煙に巻かれはしないけれど、視界は真っ白。できるだけ煙から顔をそむけて、一酸化炭素中毒を恐れながら、そっと息をする。

さいわいに、儀式(?)は数分で終わった。

男たちは元の場所に座り、族長が私たちに背を向けて焚火の前に立った。

「ゴンゴン。ジェニョミ？ ジェニョニヤ？」

右手を水平に振ったり、自分や私たちを指差したり。左手は、ほとんど動かしていない。

族長は短い演説(?)を終えると、腕組みをして——他の者の発言を待っているらしい。

「ミ！」

若い男が右手を上げて立った。顔の化粧になんともなく見覚えがある。海岸で私たちを捕まえたやつのひとりだ。

若い男が進み出て、ソフィと向かい合った。

「ニャ、ミミミ」自分を指差してから、仲間に向かって順番に指差す。

「ニョミ！」ソフィの乳房をつかんだ。

「痛いっ……やめて」

ソフィが身をよじったが、手足だけでなく腰も縛りつけられているから、男の手から逃れることなどできない。

「ニョミ、ニョミ！」

男は自分の胸を平手で叩いてから、ソフィの乳房を両手でこねくり始めた。

俺の胸は平らだが、こいつの胸は膨らんでいる。男のジェスチャーは、そんな意味を表わしているのではないだろうか。

男はさらに激しく乳房をこねくる。スリムなボディなのでじゅうぶんグラマラスに見えるCカップくらいの形の良い（羨ましいくらいに上向いた）乳房が粘土細工みたいに変形する。

「痛い……お願いだから、やめて！」

言葉は通じなくても、声のトーンから訴えの内容は理解できるはず。けれど、男は平然と乳房を虐め続ける。

「オオン、ニョミ！」

男が巻貝のペニスケースを外した。だらんと垂れているそれを、右手で握った。それから、ソフィの股間を掌で掬い上げる。

「ニョミ！」

ニョミは、両者の違いを表わす言葉だという推測は、当たっているらしい。

「ニョミ、ニョミ」

男は、ぱんぱんとソフィの股間を叩いて、訝し気な表情になった。

「ンン？ ジェニョ……？」

ジェニョという言葉も、何度か耳にしている。けれど、今度はイントネーションが違っていた。尻上がりで、疑問形に聞こえた。

「ジェニョ、ジェニョ？ オオオ、ゴンゴンゴン！」

男が、淫裂に中指を突き立てた。

「いやああっ……そこは赦して！」

ソフィの悲鳴が切迫する。

「痛い！ 抜いて、お願い……」

まさか——という疑念を、ソフィが肯定した。

「わたし、ヴァージンなんです。お願いだから、赦して！」

一瞬、男どものあいだに小さなどよめきが湧いた。これまでの、ニョミだのゴンだのという声ではなく、なんとというか、もっと人間ばいどよめきだった。まさか、ソフィの言葉を理解——したのではなく、もっと根本的な事実には驚いているようだった。

「オオオ？ ゴンゴン、ゴン？」

族長が左手の親指と人差し指でU字形を作って、そこに右手の人差し指を抜き差しした。

「ジェニョ……？」

若い男がソフィの股間から指を引き抜いて、目の前にかざして透かし見る。

「ニャミ、ジェ！」

赤く染まった指先を、まわりの男たちに見せる。

「ドワ？」

別の男が、若い男を指差した。

「ジェニョ、ミ？」

右手で自分の尻を指差し、それから左手の指を2本立てた。

「ニョ、ニョニョ」

若い男がソフィの足元にしゃがみ込んだ。股間に右手を差し入れて、もっと奥へ指を進

めた。

「やめて！ いい加減にして！」

私からは見えないけれど、ソフィのうろたえぶりを見ると——アヌスをつつかれているらしい。

「ミ！ ミ！」

股間の奥深くに差し入れた右手をさらに突き上げ、左手で淫裂をくじった。そして、指を2本宙にかざす。

「ニャミ、ゴンゴン、ジェミ！」

ペニスを指差し、ソフィの尻を指差し、またペニスを指差ししてから淫裂を指差す。

アヌスとバギナのどちらにもペニスを挿入できる——そう言っているのではないだろうか。それに驚いているのではないだろうか。

まさか……。異世界という単語が、生々しく甦った。まさか、この世界には女性が存在しない？ あのテントの中には、誰も居ない？

まさか。それでは、繁殖不可能……だろうか？

無性生殖……は、あり得ないと思う。ここにいる男たちは、みな褐色の肌と黒い髪だが、顔つきが違う。面長で彫りの深い顔もあれば、丸っこくて鼻が低くてアジア人めいた顔もある。同一のDNAが引き継がれる無性生殖では不可能だ。

「ニョミ！ ジェニャ！」

別の男が強い口調で叫んで、私の前に立った。

「ミ、ゴン」

男は自分の顔を指でなぞった。そして、私の顔を両手で挟む。

「ニャ、ニョゴン」

私の顔をなぞり、乳房から腰にかけて掌を滑らせて。

「ミ、ゴン」

最後に、指をくねらせながら自分の身体をなぞった。もしかして、化粧の紋様をなぞっ

ている？

「ニャ、ジェニャジェニャ！」

私を指差してから、両腕で自分を抱いて、ぶるぶるっと身体を震わせた。

俺は化粧をしているが、こいつはスッピンだ。そう言っているのだろう。身体を震わせたのは、スッピンがおぞましいという意味だろうか。もしかすると、この世界では身体に色を塗らたくらずに外へ出るのは、私たちの世界では裸で出歩くことに等しいのかもしれない。

「ニャ、ジェニャ！」

男はまた私を指差し、それから海を指差した。

「ジェ、ジェ、ニャ！ ニョミ、ニョミ！」

男が腕を大きく広げて、煽るように上下に振った。

「ジェニャ、ジェニャ、ジェニャ！」

私たちを取り囲んで座っている男たち全員が、こっちを指差して叫び始めた。

こいつはジェニャだ。そう言っている。ジェニャに死刑の意味は無いと信じたい。

「ゴオオオン！」

族長が重々しい声を発した。男たちが、一瞬で静まった。

「ジェニ、ニョミ、ジェニャ。ゴンゴン、ゴンゴンゴン」

手首の関節を口に当てて右手を突き出し、指を上下に開閉させる。クチバシを連想させる動きだ。いや……？ 指を漫画の効果線に置き換えたら？ 私に喋らせようとしているのかもしれない。

「オオオ、オオ」

納得したようにうなづく男たち。

族長は満足げに皆を見回して。太陽を指差した。

「ゴンゴン、ゴンゴン」 私たちを振り払うようなジェスチャーをしてから、両手を自分に向けて口の位置まで持ち上げた。頭を軽く上下に振った。

「オオオ……」

男たちが一斉に立ち上がって——それぞれのテントへ戻って行った。

ゴンゴンには、特定の意味が無いらしい。もしかすると、DOに相当するのだろうか。だとすると——私たちの処置はあとまわしにして、昼食を摂ろう。そう言ったのかもしれない。太陽を指差したのは、時刻を表わしたのだ。

「ほんとうに……異世界なんだわ」

ソフィが、呆然とつぶやいた。今度は、否定する気になれなかった。

いちばんの証拠は、彼らのコミュニケーションだと思う。ごく限られた語彙を複雑なジェスチャーで補っている。こんな部族は、テレビでもネットでも見たことがない。

残虐

10人ということは、集落の半数ほどの男たちがテントから出て来て、料理らしいことを始めた。焚火のまわりに石を積んで竈を作る。貯蔵庫らしい、いちばん大きなテントから骨付きの肉を持ち出して竈の上に並べる。小麦粉のような物を水で練って、大きな葉に包んで竈に放り込む。

動物の脂のような小さな塊が幾つも焚火に投じられて、炎が激しく燃え上がった。

5人が別働隊として、大きな革袋を持って森の中へ姿を消して。じきに、革袋をぱんぱんに膨らませて戻ってきた。

1時間としないうちに食事の用意が整って、焚火を囲んで食べ始めた。肉に振り掛けている白い粉は、海水から煮詰めた塩かもしれない。

焼き肉の香ばしい匂いが、私の断線していた食欲の回路をつないでしまった。それはソフィも同じらしい。男たちが豪快にかじっている肉を、物欲しそうに眺めている。

族長がかじりかけの骨付き肉を持って、ソフィに近づいた。口元に肉を差し出す。

ソフィは族長の目を見詰めて、それから諦めたように口を開けて、肉を小さくかじり取った。好意を拒んで怒らせることを恐れたのだろうけれど。すぐに、今度は大きくかぶりついた。

ソフィの身体をあれこれ弄って、乳房が有るだのペニスが無いだの騒いでいた男（個々人の造作が違おうし、化粧の文様も違うから、簡単に識別できる）が、やはり肉を持って私に近づいてきた。

気乗りしないまま、ひとかけら口に入れて。ソフィが急にがつついた理由が分かった。だいいちに、すごくおいしい。極上のステーキはソースなんか掛けずに塩だけで食べるのが一番おいしいというけど、そのレベルの味だった。そして。すごく空腹だったと気づいた。ふた口目は夢中でかぶりついて——気がついたら、骨付き肉が骨だけになっていた。

「ゴオオン！ ミ、ミ！」

男が嬉しそうに骨を宙に掲げて、それから……骨の先で私の淫裂をなぞった。

「く……」

感触はおぞましかったが、それ以上に。ジェスチャーの意味を分かってしまったのが悔しかった。食わせてやったんだから、姦^{かん}らせろ——そう言っている。

悔しいけれど、それだけのことでもある。ここがほんとに異世界だったら——なんて、それは考えないとしても。絶海の孤島に住む蛮族に捕まって、元の世界へ帰れるかどうかも分からない。蛮族（肉をくれた男だけなのか、全員なのかも分からないけれど）に犯されながら、ずっとこの島で暮らすなんてことにもなりかねない。キャンパスライフも、就職も、結婚も……なにもかも失ってしまう。あまりの急展開にちっとも実感が持てないのだけれど、つまり人生が詰んじゃってる。それに比べたら、レイプくらいささやかなエピソードでしかない。とは、ちっとも思えないんだけど。

そんなぐちゃぐちゃな想念は、族長の陰しい声で吹き飛ばされてしまった。

「ニョ、ニョニョ。ニョゴンゴン。ジェニョ、ミニャ。ゴンゴン」

激しいジェスチャー。意味は見当つかないけれど、姦^{かん}らせろと言った男を叱っている雰

困気。男が背中を丸めて、車座の中へ戻った。

族長が一同を振り返って、またクチバシのジェスチャーをした。

「ジェニョ、ニョミ、ジェニャ。ゴンゴン」

族長がソフィに顔を近づける。

「ミ、ゴンゴン。ジェニョ、ニャゴンゴン？」

ミで自分を指差し、ニャゴンゴンでソフィを指差し。

「なにを言ってるのか、わからないわよ。それより、水を飲ませてください」

ソフィの言葉で、自分も喉がすごく乾いているのに気づいた。

族長が右手を振り上げた。

バシン！

痛烈なビンタを喰らって、ソフィの顔が横に吹っ飛んだ。

「……………！？」

縛られたり磔にされたりあちこち掴まれたりは、あったけれど。正面切っての暴力を振るわれたのは、初めてだった。

ソフィはショックを受けて茫然としている。

バシン！

今度は左手でのビンタ。

血の気の引いた頬に、真っ赤な手形が刻まれている。その頬を、族長が両手でつまんだ。

「ミ、ゴンゴン。ジェニョ、ニャゴンゴン？」

頬を上下に引っ張る。自分たちと同じように喋れ——そう言っているのだろうか。

「ごんごん！」

彼らがもっとも頻繁に使っている言葉（？）を真似て、叫んでみた。

おや？ といった顔で、族長が私を振り返った。

「ごんごん。水を、ごんごん……」

水はなんというのだろう。男たちは、椰子の実を半分に割ったような椀に、革袋の水を

注いで飲んでいる。

私の横に座っている男に顔を向けて、その腕をじっと見つめて。

「ごんごん。水、ごんごん」

男が腕を私に向かって掲げた。

「ワァ、ジャニョ、ジェ？」

「わぁ、ごんごん、ごんごん」

がくがくと頭を縦に振った。

「ジェニョ、ジェワァ？」

男が族長に尋ねた（のだろう）。

「ジェ、ゴンゴン」

族長がうなずいた。

男が立って、水の入った腕を私の口にあてがってくれた。腕が大きく傾けられて、予想していたよりずっと冷たい水が口に流れ込んだ。だけでなく、鼻にまであふれて、むせてしまった。でも、すごくおいしかった。舌全体がいろんな味をいっぺんに感じ取った。かすかに甘くて、かすかにしょっぱくて、ビールみたいなほろ苦さも。

つまり、身体が切実に水分を求めているのだと思う。漂流していたあいだには海水を飲んでしまっただろうし、炎天下に礫にされていたし、食べた肉は塩味が利いていたし。

「わぁ、ごんごん。わぁ、ごんごん」

ソフィも私を真似て水を要求した。族長が車座に向かって腕を伸ばす。

「ワァ、ジェ」

差し出された腕を受け取って、ソフィの口に運びかけ、ふっと唇をゆがめて白い歯を剥き出しにした。嗤ったのかもしれない。腕の水を口に含んで、顔をソフィに近づける。

ソフィは嫌悪の表情を浮かべたが、諦めて目を閉じて、族長の唇を受け容れた。

「んむ……」

族長が顔を引いたとき、ソフィは涙を流していた。ジュニアハイからタチで通してきた

彼女は、これが男とのファーストキスだったかもしれない。

もし、そうだとしたら。いざ、そのときには……私は、せいぜいビッチに振る舞うことにしよう。男とのSEXなんて、たいしたことはない、ソフィを安心させてあげるために。いや、それだけでは足りない。

もしも、ほんとうに（いったいこれまでに何回、IFを積み重ねてきたらどうか）ここが異世界で、蛮族たちが女の存在を知らなかったのだとしたら。この肉体を餌にして男どもを牛耳ることも不可能ではない……かもしれない。褐色の蛮族どもにかしずかれるふたりの白き女王。まるきりラノベだ。異世界ファンタジーだ。

なんて現実逃避の脳天気は、すぐに打ち砕かれてしまった。

水を飲ませてくれた男を押しつけて、族長が私の前に立った。

「ニャ、ムウ、ゴンゴン」私を指差してから、両手を大きく振る。

それを受けて、車座の中から幾つかの声が上がった。

「ジョニエ……ジェニョ、ジェニョ」

「ニョムウ」

「ニョニャ、ゴンゴン」

族長が地団太を踏んで、自分で動いた。蔓を持ってきて、私の胸と腰をキの字架の柱に縛りつけてから、両手の縄をほどいた。

「ゴンゴン、ゴンゴン」

クチバシぱくぱくの手真似をしてから右手で自分と私を指し、両手をぶんぶん振り回す。

縛り直したのだから、磔から解放してくれるのではない。でも両手だけは自由にしてくれた。ということは……

「み」

彼らの仕草を真似して、握りこぶしを胸の高さに上げ、親指を突き出して自分に向けた。

「オオオ、ミミミ」

族長が自分を指差し私を指差し、右手を車座の男たちに向かって水平に振った。

「み、み……」

私はもう一度自分を親指で指し、人差し指で族長を指した。ただの物真似ではなく、彼らの言葉（の一部）を理解した証に、車座の人たちを順番に指差していった。

「み、み、み、み、み……み！」

最後に、族長の真似をして右手を水平に振った。

「オオオ。ジェミ！」

族長がぴょんぴょん飛び跳ねた。表情から推察しても、嬉しさの表現だ。

「ニョニヤ、ジェミ。ジェジェムウ、ゴンゴン」

数人がわらわらと私に駆け寄って、キの字架から降ろしてくれた。それから、ソフィの蔓もほどきにかかってくれたのだけど。

「トンミ！ ジェニョ、ミ？」

車座に残っている男のひとりが、ソフィを指差した。それから立ち上がって、私の腕をつかんで、ソフィの横へ引っ張る。

私の腕とソフィの腕を交互につかんで。

「イ、イ、ニョミ」

髪の毛を引っ張り、淫毛をつかみ、同じ言葉を繰り返す。

乳房や性器を弄った男も、ニョミを繰り返していた。異なっているという意味かもしれない。ソフィと私とでは、肌の色が違う。といっても、蛮族の褐色に比べれば、どちらも『白』だと思うけど。髪は、私は蛮族と同じ黒だが、ソフィは金髪。

「ニョミ、ジェニヤ！」

男が腕全体を伸ばして海の方角を指した。海から来た私たちは、人種が違うと言っているらしい。

「ニャムウ、ゴンゴン」

族長が苛立たし気に喚いた。男たちは族長が私を縛り直したと同じように、ソフィの胸と腰を立木に縛りつけてから、両手を自由にした。

「さっきの私と同じにして。この人たち、コミュニケーションを求めている。ミで自分を指差すのが……」

私を『予約』した男が、目の前に立ちはだかった。腕を水平に振り上げて、ビンタを張ろうとする。

ぶんっ……

「きゃっ！」

とっさに後ずさって、かわした。のが、いけなかった。

「ウゴオオッ！」

また腕を振りかぶって、踏み込んでくる。

さらに後ずさろうとして、後ろにいた男の胸にぶつかった。二の腕もろとも抱きすくめられた。

ぶうん、バチイン！

左の頬にビンタを喰らった、目の前で星が飛び散って、耳がキインと鳴った。

「ニョ、ニョ！」

男は自分の口を手でふさいでから首を横に振った。アドバイスをするなという意味だ。

「ジェニョ、ニョゴン」

「ひどいことはしないで」

ソフィがかばってくれたけど、かえって男の怒りに油を注いだけだった。

「ミ、ジェムウ」

私を――でなく、私を羽交い絞めにしている男を指差す。

髪の毛をつかまれて、正面を向けさせられた。

「ジェゴン、ジェムウ」

男は、今度は拳骨を振り上げて……

「やめて……」

ぶんっ、バシン！

右の頬をグウで殴られて、また目の前で星が飛び散った。鼻に激痛が突き抜けた。

「ゴンゴン。ニャ、ジェニョ、ゴンゴン？」

族長がソフィに、蛮族の言葉を喋れと迫っている（のだろう）。

「なによ。ゴンゴンだのジョンジョンだよ。分からないわよ！」

暴力への怯えが、彼女をヒステリックにさせている。

「ニョ。ニョミ、ジェニャ」

族長が重々しくうなずいた。そして、私を振り返る。

「ジェニョ。ミ？ ニャ？」

後ろから突きとばされて、私はソフィと族長との間に倒れ込んだ。

「ジェ、ゴンゴン。ミ？ ニャ？」

族長が私に指を突きつけ、それから自分とソフィを順番に指差した。ふたりのうちのどちらかを選べ——そう言っているのかもしれない。選んだら、どうなるのだろう。

「ジェニョ、ゴンゴン。ゴンゴン！」

族長が地団太を踏んで、苛立ちを表わす。

ええい、なるようになれ！

二択なら答は決まっている。私は起き上がって、ソフィの横に立った。

「ニャ？ ニャ？ ニョミ！ ジェニャ！」

族長だけでなく、様子を見守っていた者までが、私を指差して叫ぶ。

「ニャドウ？ ニャワア？」

族長が腕を伸ばして森を指し示し、つづけて海の方角を指し示す。

「ニャワア、ゴンゴン」

ほとんど全員が唱和した。

「オオオ、ジェ」

族長がうなずいて、両手で大きな物を持ち運ぶジェスチャーをした。

「ゴンゴン、ゴンゴン」

男たちが、ソフィを磔から降ろした。

けれど、自由にしてくれるのではなかった。私もソフィも、すぐに手足を縛られた。そして、足を縛った蔓に太い蔓を継ぎ足して——引っ張り始めた。

たちまち転んで。それでも3人がかりで引きずられる。

「痛い……！ やめて……によ、ごんごん！」

ジェはY e s、ニョはN oだと見当をつけて叫んだ。

「ジェニャ、ゴンゴン」

クチバシのジェスチャーを交えて男たちが嗤った。Y e sニャ、S p e a k i n g——といった意味だろうか。Y e sというより「～のくせに」といったニュアンスかもしれない。必要に迫られたら、短時間で外国語を覚えるというのはほんとうだ。なんて感心している場合じゃない。裸で地面を引きずられてる。

踏み分け道を引きずられているうちは、まだしもだった。砂浜に出ると、紙やすりで肌をこすられているも同然だ。

「やめて！ なんでも言うことを聞くから、もう赦して！」

ソフィが必死に訴えるが、男たちはますます愉快そうに嗤うだけだった。

わたしは——身体をひねったり、腕を突っ張って一瞬だけでも身体を浮かそうと試みたり。まるきり無駄な努力を続けている。

波打ち際で男たちが足を止めたときには、全身擦り傷だらけになっていた。皮膚が剥けていないのは、それでも無駄な努力の賜物だった。

男たちが、私とソフィを抱え上げた。

「ニャワア、ジェムウ、トワア、ゴンゴン」

これは、まったく理解できなかった。けれど、これからなにをされるかは、明白だった。

男たちは、私とソフィを抱えたまま、腰が浸かるまで沖合へ歩いて——私たちを水の中へ投げ込んだ！

「うわっふ……！」

縛られていては泳げない。立とうともがくと、海中に沈んでしまう。

「ノー！ 助けて！ 殺さないで！ わたしを犯すんでしょ！」

ソフィが金切り声で……泣いている。

溺れ死ぬよりは、マンマンゴンゴンのほうが、はるかにましだ。なんて、私が落ち着いているのは。男たちが陽気に嗤っているからだろう。ソフィが指摘したように、殺してしまっただけは元も子も無いはずだ。

私はもがくのをやめて、両手が使えないので苦労したけど、なんとかあお向けになった。穏やかな海だから、浮身をしていれば溺れることは……

何本も手が伸びてきて、ひっくり返された。だけでなく、足で踏んづけられて海底まで沈められた。

驚愕と恐怖から立ち直るまでに、ぶくぶくっと泡を盛大に吐き出してしまった。

そのまま押さえつけられるのかとパニックりかけたけど、足はすぐに引っ込められた。また沈められるのは嫌（なんてもんじゃない！）なので、縛られている足をそろえてドルフィンキックもどきで、男たちから逃げた。勢いをつけて遠くまで逃げた。スピードが落ちてくると両足を腹へ引きつけて、一気に身体を起こして足を伸ばした。

ザバアッと顔が水面に出て、空気を貪り吸った。まだ、足が立つ浅さだった。

「はあ、はあ、はあ……」

男たちが追いついてきて。また海中に沈められた。

男たちは、まだ嗤っている。嗤いながら人を殺すなんてことが……

違う！ たしか彼らは私がニョ（No）ミで、ジェ（Yes）ニヤと言っていた。

No－Human, Yes－Animal という意味だとしたら？

犬を棒で叩いたり、昆虫の脚を千切ったり。そういうことを、子供たちだけでなく大人も平然としてのける。

必死にドルフィンキックで逃げて、立ち上がって、叫んだ。

「によ、によによ、にゃ！ じえ、み！ じえ、み！」

男たちがクチバシのジェスチャーをしながら、さらに大声で囓う。

「ニャ、ゴンゴン」

動物が喋っている。だからって、なにがおかしいのよ！

男たちが囓いながら、ゆっくりと近づいてくる。あつちは手足を使えるから、すぐに私を捕まえられるはずなのに、本気は出していない。遊んでいる。

だからって、遊びにつき合ったりしたら溺れる。私がパニックのを面白がっているのだとしたら、必死に逃げないと機嫌を損ねて——もっと虐められる。

追いつかれる前に自分から海中に身を投げ出して、その勢いも使ってドルフィンキックで逃げた。浜辺へ戻ろうとしたら捕まるし、沖へ逃げるのは怖い。海岸線に平行に、力のかぎり泳いだ。息が苦しくなって、泳ぎながら息継ぎをしようとしたら、思い切り水を吸い込んでしまった。

落ち着け落ち着け落ち着け——念じながらも、じたばたもがいてしまう。顔が上がらない。足が底に着かない。

ほんとに溺れかけて。追いついてきた男たちに髪をつかまれて引き上げられた。いつ沈められるかと怯えながら、空気を貪る。

「はあ、はあ、はあ……うわっぷ?!」

また海中に投げ込まれた。でも、沈められなかった。足を引っ張られる。息継ぎができないまま、砂浜まで連れ戻された。

ソフィも引き揚げられていた。泣きじゃくっている。

「ニョ、ニャワア？」

「ニョ、ニョ。ジェニョ、ニャドウ？」

Noニャワア。Yes／No（＝疑問形？）ニャドウ。

ニャは、ミの対義語。たしか、ワアは水だった。水の動物ではないということだろう。どこまで本気でどこから遊びかは知らないけれど、私たちが人間ではないとしたら、人魚か何かだと思って、それを確かめたのだろうか。たしかに、私たちは海から漂着したのだ

から。

私とソフィは、また縛り直された。今度は立たされて体前屈をさせられて、右の手首と右の足首、左と左を、ひと括りにされた。そして首に太い蔓を巻かれて、歩かされる。

ろくに前が見えないし、うまくバランスを取らないと前につんのめりそうになる。膝を曲げて尻を後ろに突き出して、きつと無様な格好に見えているだろう。『STAR WRS』あたりに出てきそうな歩行機械——あ、蛮族が知っているわけがない。濡れた髪が地面を掃いて、泥がこびり着く。

でも、地面を引きずられるよりは、ずっとましだった。

広場まで連れ戻されると、蔓をほどかれて。

「ウープ、ゴンゴン」

押さえつけるようなジェスチャー。

意味が分からないでいると、背中を押さえつけられて四つん這いにさせられた。

「オオオ。ニョミ。ゴンゴン」

横から覗き込んで、乳房をわしづかみにして引っ張る、揺する。そんなの、自分のペニスでやればいいじゃない。

「痛い！ やめて……」

ソフィのほうが触り甲斐があるので、被害も大きい。

「によ、ごんごん。によ！」

Stop-Do と、言ったつもり。

「ニョ、ゴンゴン」

オウム返しされて、口をつねられた。

「ゴンゴン、ゴンゴン」

バシンバシンと、尻を叩かれた。だけなら、まだしも（じゃない！）。掌を上から下に叩きつけて、曲げた指を尻の割れ目やもっと手前の割れ目に食い込ませてくる。掌がしばらくそのままの位置に留まって、指でぐりぐりとえぐったりもする。粘膜をざりざりと擦

られる鋭い痛みと恥辱。なのに、何度も繰り返されるとぬかるんできて、マゾヒスティックな快感を呼び覚まされたりする——のは、私だけだった。

「痛いっ！ お尻を叩かないで。によごんごん！　によごんごん！」

蛭族どもは喰い転げながら、何人もが交替でソフィの尻を叩く。ソフィの尻に紅葉の形が重なって、真っ赤に腫れあがった。

「ニョ、ゴンゴン」

族長が重々しく宣告すると、悪ふざけはピタッとやんだ。

「ニャドゥ、ムウ、ボドゥ」

森の奥を指差して言う。

蛭族どもがわらわらとまとわりついてきて、四つん這いの手足を折り曲げ、手首を二の腕に、足首を太ももに縛りつけた。

また首に太い蔓が巻かれて、私とソフィは森へと引立てられた。手足を折りたたまれているので、肘と膝で歩くことになる。人間犬とか人間豚として、海外のSMサイト（虹なら日本でも）ではよく見かける趣向だけれど、自分がされてみると、すごく惨めだ。

そして、痛い。肘も膝も、関節のすぐ外側が皮膚になっている。体重を受け止める筋肉も脂肪も無い。SMサイトの画像だと分厚いサポーターを巻いたり、専用のブーツ（？）を履かされたりしているのも当然だ。もともと、地面は軟らかいし、森に踏み込むと落葉がクッションになってくれるので、すぐに皮膚が破れたりはいしない——けれど、時間の問題だろう。

「ムウ、ゴンゴン」

掛け声に合わせて、尻を叩かれる。適当に折り取った木の枝を使っている。

ソフィも泣いたり文句を言ったりするのはやめて、黙々と歩いて（這って？）いる。

「ムウ、ゴンゴン、ゴンゴン」

しつこく追い立てられて、ふつうに歩くよりも速いくらいのスピードで這う。歩幅（？）が半分以上になっているから、ピッチは2倍以上。たちまち汗びっしょりになる。目に汗

が入っても手で拭けない。犬みたいに頭をぶるぶるっと振って、汗を振り払うしかない。

「ニョムウ」

ぐいっと、首の蔓^{リード}を引き絞られた。止まれという意味だろう。

「ムウ、ゴンゴン」

右の脇腹を蹴られた。

「きゃんっ……」

不意打ちに驚いて、左へ倒れた。犬みたいな悲鳴をあげてしまったのが悔しい。

「ウープ、ウープ」

リードを上引に引っ張られる。寝返りを打ってうつ伏せになって、手足を引きつけるようにして突っ張って、起き上がった。

「ムウ、ゴンゴン」

リードを持っている男は、私の左太腿の外に片足を置いて右の脇腹を蹴り続ける。左へ左へと逃げているうちに、身体の向きが180度入れ替わった。文明人だったら、犬に『おまわり』を教えるときだって、こんな虐待はしない。

「ウーム。ジェ、ニャドウ」

男どもが頷き合う。私の動きに満足している。ニャドウ（森の生き物？）だと納得している。

「ニョムウ、ジェゴンゴン」

ひとりが左手で作ったU字形に右の人差し指を出し入れすると、他の男たちも同じジェスチャーを繰り返した。そして、私とソフィに粘つくような視線を向けた。日常世界だったら『好色の』とか『欲情も露わな』とか形容するところだけど、この世界でも……ジェスチャーの解釈が間違っていなければ、たぶん同じだろう。

「ムウ、ゴンゴン」

リードを引かれて、尻を叩かれた。

けっして、いそいそではないけれど、私は素直に這い歩き始めた。犬みたいに引き回

されるよりは、人間の女性として犯されるほうが……屈辱だけれど、身体は楽だと思う。

女王の座への第一歩でもある。

それとも。女として扱われるのではなく、生身のオナホ扱いされるのだろうか。冗談じゃない。オナホや羊や鶏と同じに扱われてたまるものか。この世界に人間の女性という概念が存在しないなら、ラブドールだっていい。A I 搭載のラブドールが男を翻弄するR指定のラノベだってある……と、思う。

森の中を這い歩かされているとき、またターザンの雄叫びが聞こえてきた。

「アーアアア、ア！ アーアアア、ア！」

樹木に遮られて見えないけれど、また広場に煙が立ち込めるのだろう。

——森を抜けたときには煙は晴れて、でも、いがらっぽい臭いはまだ残っていた。